

主の洗礼

マルコによる福音 1:7-11

(そのとき、洗礼者ヨハネは) こう宣べ伝えた。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。」

そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

主の洗礼はわたしにとってはちょっと変なんです。それは、どうして神の子であるイエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けなければいけないのか。これじゃ「ヨハネ> イエス」となるんじゃないか。イエスよりヨハネの方が偉いというか上（うえ）って感じになってしまうじゃないか、ここが納得できないなあ、チョット変だよって思いです。

<マルコの福音について>

今年の主日はマルコの福音をおもに読み進めていくのでマルコの記事を読んだわけですが、この「主の洗礼」は4つの福音書すべてに書いてあって、基本的には同じことが書いてあります。マルコの福音は全体としてとてもシンプルに書いてあることに特徴があり、きょうのテキストもそっけないほどにシンプルです。物足りなさはあるのですが、だからこそ言いたいことがストレートに伝わるという利点もあると思います。

1) わたし（ヨハネ）は水で洗礼をしているけれど、わたしより優れた方が後からやってきて、聖霊で洗礼をさずける。

2) イエスが田舎、ガリラヤのナザレからでてきて（みんなにまじって）洗礼をうけた。

3) そのあと天からの声があった「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」
きょうのマルコの福音をおさらいするところなるでしょうか。

<イエスに洗礼はほんとうに必要だったのか？>

とりいそぎ、今現在の洗礼についてちょっと確認してみます。

それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。ロマ 6:3

キリスト信者であることの出発点は洗礼です。信者にとって洗礼の「恵み」とは、本質的には十字架で死に、墓に葬られ、復活されたキリストに結ばれること。つまり洗礼によって人間は十字架につけられたキリストに結ばれて救われる。とても重要な儀式として洗礼があり、意味づけられています。

この点からすればイエスは洗礼を受ける必要はない。イエスがキリスト信者であるという言い方はありえません。わたしたちが受ける洗礼の意味合い

「キリストに結ばれて救われる」からすれば、あたりまえですが、イエスさまが洗礼を受ける必要はありません。むしろ授けるお方となります。でも聖書のどこにもイエスは洗礼を授けたという記録はないんです（これもまた不思議、きょうの福音とは直接関係していないので今はふれません）

ところが、イエスはヨハネから洗礼を受けています。洗礼を授けたヨハネにしても「わたしより優れた方」が後から来るんだ、自分はその方には及びもつかないなんていっているわけです。でもヨハネはイエスに洗礼をしてしまいます。そのあとどうなったかという、「天が裂け、霊が降って、天の声が聞こえた」となります。

この天の声にしてもヨハネにも聞こえただろうけれど、ヨハネはそれでもイエスが「自分より優れた方」としてすぐに悟ったかということそれはわからない。このことあった少し後の方で福音書にはいろいろ書いてはあるのですが、けっこう疑っているというか信じきれていないところがあるようです。その

人（イエス）を良く知らないとなかなか自分で納得できない、さすがのヨハネでも知りもしない人をあたまから信じるということができなかつたのかもしれない。

<イエスが洗礼をうけなかったとすると？>

でも、イエスが田舎からやってきて、やっぱり洗礼受けるのはやめとこうってなったらこれでは話がすすまない。イエスは神であるが人の低みまで降りて人の間で活動するインマヌエルの神（神が私たちと共に）でなければイエス・キリストではないでしょう。でも洗礼だけでキリストかというところではない。「水だけではなく、水と血とによって来られた」お方がイエスです。洗礼と十字架・復活もなければならぬのです。

この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とによって来られたのです。そして、“霊”はこのことを証しする方です。“霊”は真理だからです。（ヨハネの手紙第一 5:6 きょうの第二朗読から）

ここでいっている「水と血」の「水」はヨルダン川での洗礼であり「血」は十字架をさしています。地上でのイエスの活動全体は「水と血を通して来られた方」が聖霊に導かれておこなわれたという意味内容になるとおもいます。

<不思議な感じ、ふしぎ観>

「主の洗礼」わかるようでわからない不思議な感じがわたしにはまだ残ります。教会の歴史を見てもこの不思議さは始まりの頃からあるようで、教会内の内ゲバの原因にもなっています。そんな歴史の中でこうしようよ、って決まってきたのが二性一人格（イエス・キリストはまことの神でありまことの人である）三位一体の神（父と子と聖霊）の教義（ドグマ）なんだなあわたしは理解していません。

でもこの「不思議な感じ」というのは今を生活しているわたしたちにとって必要な感覚ではないかと実感しています。というのはこの理屈ではなかなか理

解しがたい感じをどう自分自身のなかで大切にしていくか、これが現代のキリスト教信者に欠けてはならないと思うからです。これを不思議としないとゴリゴリに固まった信者さんになってしまうんじゃないか、身内で内ゲバやるんならそれはそれでご勝手にともいえるのですが、開かれた対話を生み出すためにはこの「ふしぎ」観を大切にしていく必要があると考えています。
